

# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

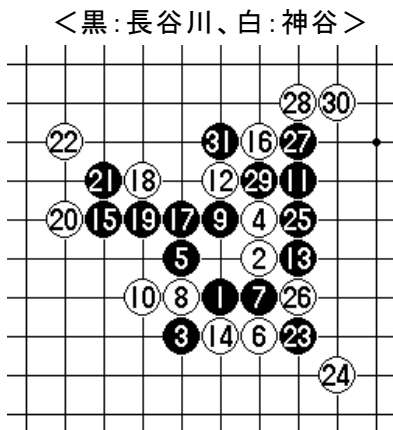
### ● 第63回 ●

#### ■ 今年のA級リーグ

今年もA級リーグが9月に行われた。ドイツは日本のように祝日ではなかった。ので最終日はリアルタイムで見られなかったが、十分楽しめた。特に今回から会場にカメラを設置してリアルタイムで観戦できたのが新しい試みで、手前に見える盤の様子から進んだ手順を予測したりもした。これまで挑戦手合いではビデオカメラを持ち込んだこともあったが、それは主に控室で、インターネットを使って世界に配信するなどとはその時には夢にも思っていなかった。

は連珠世界に発表されるまで非公開だったことを考えると、時代は確実に進歩している。ただし、棋譜の内容が昔より格段に進歩しているかと言え、私にはわからない。確実に言えるのは、今後はコンピュータの進化で、世界では局面がどんどん解明されていくであろう。昔気質の連珠家が今後どれぐらい生き残れるかはわからないが、壊滅的な打撃を受けるのではないだろうか。さて、A級の中で特に印象に残った局を紹介しよう。連珠世界誌では自戦記や山崎さんによる解説が今後あるだろうが、誰がどんな観点で書いたとしてもそれは連珠界にとってプラスになると前向きに考えてほしい。ということ、多少内容に不備があったとしてもご容赦を。

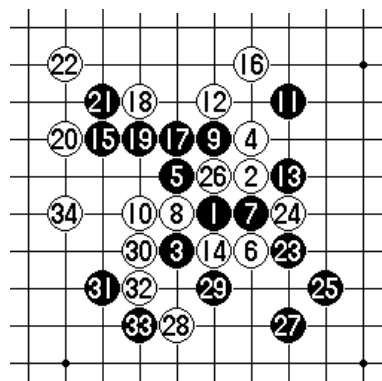
斜月三題とくれば白4の縦並びは当然だろう。白14まで進んだ時、黒15が長谷川氏らしい一着。長期戦になつた時威力を発揮するよいうな、後からじわじわ味の出るような一手である。ただ、若い神谷君は白16と筋のいい手を打ち、白18と黒を脅かしながらの防ぎで応酬した。黒も白の攻めがあるので19・21の四ノビはやむを得ない。ここで黒は23と下辺に向かった。こういう所が老獪な所で、おそらく神谷君はこれにビビった



と長谷川九段との一戦。

に違いない。24の剣先を2本使われてはかなわない、という心理が白24の敗着を引きだした。すかさず黒25から上辺に展開して、黒31まで勝ち切った。これはいわゆる、「名前負け」である。黒23を打たれた時に心理的に追い込まれたのが見てとれる。実は白24では次図のように堂々と一路上に止めていればよかつた。もし黒25と組みたてるなら、白28から追い勝ちが残る、心配する必要がなかつた。となるとこの局面は白に楽しみが多かつた。

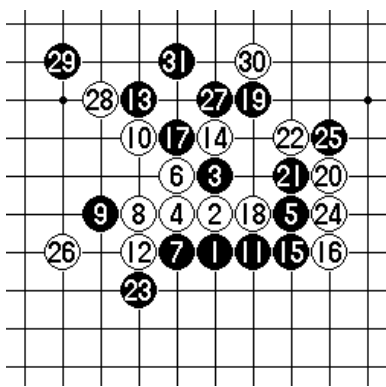
<変化図>



続いて4回戦の一番、岡部・長谷川戦を。

寒星で白18までは昨年のA級リーグでの中山―中村戦が有名だが、黒19で変わった。中山君は反対に止めていたのだが、同様に白20に防いだ長谷川氏は過去に経験があるようだ。ただ、黒23と押さえられては白防ぎ辛くなっている。黒27の三々をあえて防がない手もあった。中村名人のまねをすれば本人以外は勝てないという中村マジックに嵌ったようだ。

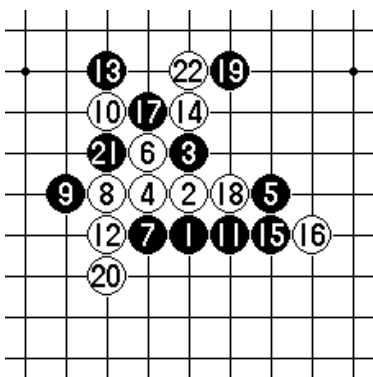
<黒:岡部、白:長谷川>



とは言っても何か對抗策を考えないといけない。一

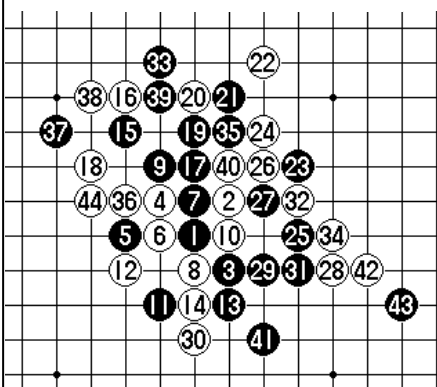
応考えたのが次の図。

<変化図>



先に白20と伸びてしまふのはどうだろうか？右辺の黒と左辺の白の厚みの対決となる。次は関西の畑さんと初出場の真野さんとの一局。

<黒:畑、白:真野>



浦月六題だが、攻め気が強い畑さんには黒がもってこいだろう。真野さんは着実に防ぐ棋風なのだろう。白10、12と堅実そのものである。黒15や23など黒は気持ち良く展開できたが、攻めすぎて白の反撃を喰らってしまふ。特に黒41が疑念の含み手で、白42の四ノビ一本で消されてしまふ、白44に回られてしまふては万事休すだ。

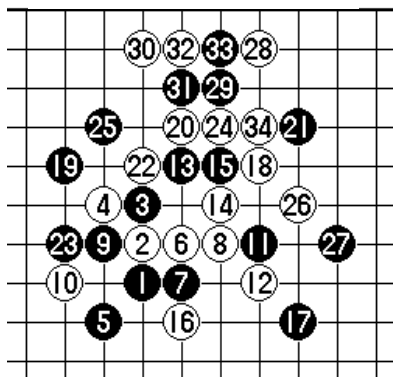
最後に、優勝決定戦を見てみよう。両者8ポイントの優勝決定戦は00年の第38期まで遡る(その時の決定戦は長谷川・奈良戦)。それ以来のハイレベルな決定戦となった。

本戦では大角九段の勝ちになっっているが、岡部君は大角君をかなり苦手にしているようだ。序盤の研究量の差がやはり大きいのだろうか？

溪月かと思っただが、寒星五題も多題打ちに入る部類

だろう。

<黒:岡部、白:大角>



白4に黒5は初めて見る手なのだが、既に打たれていたのかもしれない。ただ、白8には意表を突かれたのではないだろうか。黒9に白10が急所で、案外黒が困る。まあしかし、黒11からうまく打って、黒19までなら黒も悪くはない。ところが、白20に黒21とは？どうしたのだろうか。22の四ノビを打ち忘れたのは痛く、白22と引かれては一気に白が良くなった。さらに黒23が追い打ちをかけた敗着。白24で防ぎがない。最後は三々禁で締めくくった。